
imaginary

東山みゆと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

i m a g i n a r y

【Nコード】

N 1 2 7 9 T

【作者名】

東山みゆと

【あらすじ】

そこは完全に設計され、魔法が科学に定義される世界。混入された異端者は、果たしてその世界で何を成すのか？科学以上ファンタジー未満な世界で一人の男が少し学んで少し成長する——そんなお話。

パソコンでの閲覧推奨です。

第一式（前書き）

物語の始まりですっ！

第一式

——風に戦^{そよ}ぐ草が頬を撫でる。

なんて詩的な表現だろうか。——いや、この際詩的かどうかはともかく、近年一生で一度も使わない者も多くいるような表現であることは確かだろう。

しかしながら、彼が目を覚ました時に頭に浮かんだのはそんな文章だった。

「何だ……これ？」

具体的に正体不明の物体が彼に見えていたわけではない。今、彼の視界に移っているのは驚くほど澄み切った青空、大樹の枝に青々と茂った葉、そして、近いところでは草本。空に関しては知らないなどありえないし、後の二つに当たって、種類は言えずとも特に知らないものでもない。

彼が思わず呟いたのは、自身に起こったことに対する問いだった。

「さっきまで、電車に……」

呆然としながらも彼は立ち上がり辺りを見回す。彼がいるのはどうやら森林の中のたまたま開けた一角のようだった。

「ここ、どこだよ……？」

辺りを確認したことで、彼は改めて自身の置かれた状況に対する疑問を漏らす。生まれてこの方、日本国の首都東京から出たことなく、しかも行動範囲が一般より圧倒的に狭いことを自負している

彼としては、ここが知らない場所であるということだけでは自身があつた。

「そつだ、携帯っ」

携帯があればGPS機能なり、誰かに連絡するなりすることができる。そんな考えに至つた彼は、今度は地面付近を中心に再度辺りを見回す。すると、わずか五、六歩程の場所に愛用している手提げ鞆が落ちていた。その中には、携帯電話が放り込まれているはずである。

すぐさま彼は駆け寄り、中を漁る。記憶通りの位置に携帯の感触がある。それだけのことに僅か安堵しながら携帯を取り出すと、そのディスプレイには無情にも圏外の文字が表示されていた。

「嘘だろ……」

右手で携帯を掲げて前後左右へと移動してみるも結果は同じで、彼は最後に大きな溜め息を吐くと、とうとう座り込んでしまった。

「まるで物語の始まりみたいだな。問題は俺が巻き込まれたこの物語がラノベ系か、ギャルゲ系か。そしてジャンルは果たして恋愛なのか、SFなのか、ホラーなのか……」

最早現実逃避。内容にかなりの偏りがあるのは、それが彼の趣味であり、彼が次元において2>3という確固とした優先順位を持っているからである。

もつとも彼自身が、現実逃避でありながら、自分は飽くまでも巻き込まれた側で、主人公だと考えられないあたりがなんとも情けないな、などと自己分析をしているあたり、冷静さを取り戻すという効果はあるようだった。

——そして、それは彼が、出来れば異能バトル物じゃないといいな、と溜め息混じりに呟いた頃に聞え始める。

初めは空耳と疑う程度の音量だった。

何かが破裂したような乾いた音。それは徐々に近づいて来ている。

「じゅ、銃声……？」

無論彼は本物なんて聞いたことがなかった。しかし、もし彼が今まで見たドラマやアニメでの銃声が本物に近づけようときちんと努力されたものであったなら、聞える音は十中八九銃声であると判断した彼は、身を屈めたまま移動を始める。

それが全速力の逃亡。勿論彼だって全力で走り出せるならそうしたい。しかし、彼が銃声だと認識した時には、銃声は近過ぎ、その場は周りとは比べ見通しが良すぎた。

「とにかく近場の茂みまでっ」

焦燥に駆られている彼は、破裂音とともに徐々にもう一つの巨大な音が接近しているのに気づいていなかった。無理もない。平和な国に生まれ育った彼にとっては、銃は考えうる最大の恐怖の一つなのだから。しかし、もし冷静な者この場にいたら、まるで木々を薙ぎ倒して巨大な何かが迫って来ているようだ、と感じただろう。

「やっと着いたっ」

完全に助かったわけでもないのに、森の始まりに飛び込んだ彼は思わず安堵する。

「くっ、しっこいつ」

「駄目だキルト、こいつは俺たちの手に負えるような相手じゃねえっ！」

そんな彼と入れ替わりに、開けた空間に飛び出してくる二人の人物。一人は五十代前半の体格のいい男性で、もう一人は線の細い茶髪の少年で、事情を何一つ知らなくても何かに追われているということが分かった。

「おいおいおい、何だあれ……」

二人の様子を草木の間から覗いていた彼は絶句する。

と言つても、今となつては二人のことはおろか、二人の人物が揃つて使い込まれたポンチョのような服装をしていることも、銃を発砲していることも眼中にない。まして銃声から逃げていたことなど彼の頭から消え去っていた。

それ程の存在。それ程の恐怖に二人は追跡されていたのだ。

「……ドラゴン」

茂みに隠れた彼が絞り出した掠れ声。それに反応するように怪物は天に向けて巨大な咆哮を上げた。

第二式

ドラゴン。それは今やファンタジー作品においては無くてもならない程の代表的な空想生物である。古くは不死などの象徴であった蛇から発展したものであり、ヨーロッパ各地の伝承・神話に人を超越した力を持つ存在として描かれる。その姿に様々な差異はあり、それぞれ特徴が分かれている。

そんな非現実的な存在が彼の目と鼻の先にいる。

色から言って黒竜。翼と前足が別々に存在するためワイバーンではないが、現在ホバリング飛行していることから飛行能力はかなり高め。外見的特徴は完全に西洋竜だが、常に身体の周囲に漆黒の霧が漂っているという特徴のため、完全に同一の生物かは不明。

と、彼の頭を半ば自動的に分析が流れて行ったが、それを認識できない程に彼は動揺していた。

「師匠、逃げ切れるわけがありませんっ。一か八か戦うしか」

「馬鹿野郎っ——俺のとおっておきすら弾きやがったんだ。勝負にならねえ」

「だけどっ——がっ!？」

「キルトっ!」

問答している一瞬のタイムロスが命取りだったのだろう。遠心力を大幅に活かした、鞭のような尻尾の一撃を諸に受け、キルトと呼ばれていた少年は弾き飛ばされてしまう。ゆうに五メートルは飛ばされた少年は、何とか立とうとしたが、意識を失ってしまった。

「な、何なんだよ、これ……」

思わず声が漏れた。彼がいる茂みと少年たちがいる場所は大きな道路の横断歩道の長さ分も離れていない。にも関わらず、彼は隠れて見ていることしか出来なかった。

例えばこれが少年漫画だったなら、主人公は例え非力でも勇敢にも飛び出し、二人を見事救助するだろう。例えばこれがライトノベルなら、颯爽と現れたヒロインが圧倒的な力でドラゴンを打倒するだろう。しかし、現実はそのならない。彼の足はガクガクと震えて力も入らず、手は恐怖のあまり感覚がなくなっていた。

「ちつ……こうなりやキルトだけでも」

残された男が、ポンチョの下に隠れていた両足の拳銃ホルスターから拳銃を抜き放つ。流れるような動作で構え、左右の手から同時に発砲音。奇跡のような速度で行われた攻撃は、如何せんドラゴンを傷つけるには威力不足で、ドラゴンの足止めにはすらなっていなかった。それでも、それを連続で放てば、ドラゴンの注意を男に引きつけるには十分である。

「ほらっ、追って来いよっ」

男は左右の拳銃の発砲を繰り返しながら少年と逆方向に走り出す。男の銃がダブルアクション——つまり、一回一回撃鉄を手動で起こす必要がない操作法が可能であり、また、薬莢を排出しないからこそできた戦術だった。

しかし、相手はドラゴン。森の中ではともかく、開けた場所に出してしまうば追跡する必要などないのだ。何故なら、多くの物語で語られるドラゴンの特徴をこのドラゴンもまた有していたからである。よってドラゴンはその凶悪な歯の立ち並ぶ顎を開き、男へと向ける。

「炎——それを待ってたぜっ」

ドラゴンが火を噴くということは、ドラゴンの顔面が真っ直ぐ男を向き、かつ最もドラゴンの顔面と男が近づく時であるということ。男はそれを狙っていた。ドラゴンの鱗が如何に強靱なものであるうと、覆われてない部分——つまりは眼を狙えば関係ない。

放たれる銃弾。それは狙い違わず左右の眼を撃ち抜く——

「なっ……」

——その筈だった。

「霧で……防がれた」

絶句する男。

ドラゴンとしても間一髪だったのだろう。確かに右眼を狙った弾丸は巨大な眼を貫いていた。しかし、左眼を狙った弾丸はあろうことか霧の中で静止している。

両目を封じれば、男にも少年を連れての逃亡は可能だったろう。しかし、激痛と激昂のあまり再び巨大な咆哮を上げるドラゴンの前に男は悟ってしまった。もう、このドラゴンは自分が引き付けたり、逃亡したり——ましてや勝利することなど絶対に不可能だと。

怒りに燃える左眼が霧の向こうから男を射抜く。

——今度は、弾丸を放つ隙さえなかった。

「ぐああああああ」

放たれる灼熱。

悲鳴は短かった。非常識なほどの高温が男を一瞬のうちに炭化さ

せたのだ。

「うぐつ、はぁ……はぁ……」

一部始終を影から見てしまった彼は、胃の中身を全てぶちまけた
い衝動を必死に抑える。過度な緊張の中、人が消し炭になる瞬間を
目撃してしまったのだから無理もない。しかし、吐いてしまえば確
実に見つかる。その恐怖感だけが彼を何とか押し留めた。

「……えっ……あっ……師匠……？」

静けさを取り戻した辺りに、その呆然とした声は大きく響いてし
まった。

怒りに任せて食料になり得る獲物を一つ失ってしまったドラゴン
がその声に反応しないわけがない。故にドラゴンはゆっくりと振り
向き、未だ忘我状態の少年を見つけると、食欲を満たさんと首をの
ばした。

第三式

気付いた時には、彼は走りだしていた。

勝算などない。少年を守りたいなんて綺麗な感情でもない。ただ、人の死——しかも、圧倒的な暴力によって齎もたらされた残酷な死を、彼はこれ以上許容できないと感じたのだ。その情報さんげきを次に脳が処理した時、自分を自分たらしめる根幹的な何かが壊れる、そんな恐怖感。

——決して、正義感などではないと何度も自身に言い聞かせる。

男の亡骸を走り過ぎる時に銃把グリッブが見え、咄嗟に拾い上げる。しかし、銃把より先が溶け落ちていることに気づき、舌打ち。

彼は知る由もなかったが、この銃には元々数字や文字が刻まれていた。その殆どが溶解してしまっていたが、唯一残っていたものがある。それは、

$$V \parallel V ? (1 + \beta t)$$

この式を見慣れているなんて人間は皆無だろう。それどころか、何の式か分かるだけでも少数派だ。しかし、冷静な状態での彼は少数派の方であり、この式の意味が分かった筈である。

しかし、彼はただドラゴンだけを見ていた。

「くっそ……」

間に合わない。その焦燥に焼かれる心の命令に突き動かされて彼の脳は加速する。色、音、匂いをカッ。視界を集中。燃えるように熱い身体を中心に心臓の強い鼓動だけを彼は感じる。

そして遂に、彼は流体のように鈍足で進む白黒モノクロの世界で、ドラゴンの首よりも先に少年の元へと滑り込んだ。

だが、ここまで。

そもそも彼自身が間に合うなんて考えていなかったのだ。故にここから生き延びるプランなど存在するわけもなく、振り返れば目の前には巨大で凶悪な罅。所謂詰み。

「うあああああああああつ！」

それは悪あがきにして、投了を先延ばしにする無駄な一手だった。彼は無意識に握っていた銃把グリッブを投げつける。叫びが威力に繋がる

とでも言うように、腹の底からの絞り出した咆哮と共に。投げ付けられたそれは、くるくると回転しながらドラゴンの口内に飛び込んだ。

一瞬の静寂……

——そして、極光と轟音、衝撃

それが爆発だと認識する前に彼の意識は暗闇に落ちて行った。

少女は鼻歌交じりに森を散策していた。

鬱蒼と茂り、その迷い易さから旅人達に忌避される森も、毎日通れば日常の一環。彼女は特に何の感慨も抱くことなく足を進める。手には木製の籠。中からは色取り取りの野花が覗いていた。

「ふんふふーん」

足取り軽くスキップ——とまではいかなくとも、確かな達成感と微かな疲労感からくる心地よさを味わっていた彼女は、気の向くままにいつも異なる道を選んでみたりした。

……それがいけなかった。

最初に気づいたのは鼻に突く異臭。

「何だろう?」

好奇心の赴くままに異臭の元へと向かった彼女が発見したのは、何か巨大な黒い塊。そして、その近くに倒れている二人の人。

慌てて二人の元へ駆け寄り少女は、何か固いモノを踏んで転んでしまった。

「痛た……えつ、これって……」

最初は木の根か何かと思ったそれは、実は巨大な漆黒の翼。そう考えると、繋がっているのは胴体で、その先には首が……

「ド、ドラゴンの死骸!？」

少女の頭がフル回転を始める。

首の中程から先が”爆発したように”千切れ飛んでいるドラゴンの遺体。良く見れば薙ぎ倒されたように傾く周囲の草木。さらに、その間近で気を失っている二人の人物。何から何まで異常だった。

少女は決して読書家ではないけれど、一般知識としていくつかの物語は知っている。それが英雄譚であろうが怪奇譚であろうが、拾った者は巻き込まれる。命懸けの何かの果てに得るのは名誉や財宝。しかし、物語は成功例だから残ったにすぎず、その栄光は数々の知られざる挑戦者達の屍の上に成り立っている。

「そんな歩の悪い賭け……」

彼女は人の善意を信じない。運命なんてものも信じていない。信じられるのは自身と損得勘定で拘束された他者の行動。そんな彼女は善意でなんか動かないし、実益と損害を天秤に掛けて全てを判断する。

——少なくとも彼女自身は自らの人間性をそう分析していたし、これからも変えるつもりはなかった。

そして、目の前の事例は明らかに、リスクが高すぎた。

「と、言う訳で、僕はここで何も見なかったし、そもそもこんな所に立ち寄ってなんかいない」

独り言にしては声が大きかった。音一つない森を風が吹き抜ける。彼女は踵を返すものの振り返って一瞬逡巡。しかし、結局は再び前を向き、自身の住まいがある村へと駆け出した。当初よりも速い速度。しかし、彼女の足取りは心なしに重く見えた。

第四式

電車に乗り込むと、冷房のひんやりとした空気以外にも違和感を感じた。

——どうしようもなく浮いている。

人間という生き物は繋がりを求めるくせに、繋がるのが苦手な者をとことん弾き出す。人種、容姿、行動、理念、性格……理由なんて腐るほどある。別に、そういう人間の醜悪で不完全な部分は理解しているし、それを非難したいなんてわけじゃない。ただ、弾かれ周りから浮く者は大抵何か理由があり、その理由が至極当然なものであるうと理不尽極まりないものであるうと、それを修正するなり隠匿するなりすれば曲がりなりにも誰かと繋がれるのだということが言いたかっただけ。

ただし、俺はこれに該当しない。

まず、理由がない。

いや、そう言うとな本人に自覚がないだけのようなだが、事態はさらに深刻で、どうやら周りも繋がっていない——弾き出している意識がないらしい。

だから、ある意味繋がっているのかもしれない。ただ、それでも常に浮いているのを感じるのだ。見えない僅かなずれが世界と俺の間にあるみたいに、両親、妹、友人、教師、道行く人、購買の店員……誰と過ごしていても、違和感が付き纏う。

「よっこらせつと」

空いていた座席に座ると、無性に気まずさを感じた。

人は独りでは生きていけない。

よく聞くフレーズだ。もしかすると、偉人の言葉か何かなのかも
しれない。まあ、言い出したのが誰にしろ、これが正しいならば俺
は人じゃないらしい……もしくは生きていないか。

両親はいるし、妹はいるし、友人はいる。それでも常時ズレを感
じていれば、そのものの常に壁があるのと同じ——常に独りなのと
同じだった。

「さて、課題でもやるか……」

手提げ鞆からノートを取り出すと問題に目を通す。簡単な運動の
問題。観測者も運動しているため多少は怠いが、所詮高校の復習レ
ベルの問題だ。

「さてと、まずは運動方程式を立ててつと……」

気まずさは依然として拭えないが、気にせずシャーペンを走らせ
る。

最近では、世界にとって俺は異物なんだと納得していた。だから
馴染めない。だから繋がれない。だからズレる。だから浮く。納得
というより、諦観もなのかもしれない。

「つて、ははっ」

考え事をしていたからか、計算ミスをした。そのミスに思わ
ず笑う。

現在の観測者の座標——つまり自身の位置を解くための方程式の

解が虚数になっていた。どうやら俺は虚数で表わされる位置にいるらしい。

虚数とは2乗すると負の数になるという数字。計算上の利便性から使用されるが、現実の座標を示すのにそんな数字をわざわざ使うことなんてない。

自分が世界からズレている——そのことを図らずも証明してしまった形になり、余りの皮肉に自身を嗤ったのだ。

そして、その後……あれ？何があつたんだ？いや、その後って何だ？俺は何で思い返すように現在を認識して……そうか、俺は回想していたのか。だけど、それなら今、俺は……

彼が重い瞼を上げると、穏やかな光が飛び込んでくる。

「ドラゴンの胃ってことはなさそうだな」

軽い既視感を感じながら周囲を認識すると、彼がいるのはどうやら中世のヨーロッパ風に装飾された部屋のベッドの上だった。体のあちこちに包帯が巻かれていることや、いつの間にかベッドに寝かされていたことから、恐らく誰かに助けられたのだろうと彼は推測する。

「しかし、夢ですら見れないってことは、あ後は本気で記憶がないってことか」

彼は夢で、ドラゴンに出会うあの森で目覚める直前の出来事を思い出していた。しかし、森で思い出そうとして叶わなかった部分——つまり、最も重要と思われる最後の部分は夢ですら分からなかった

た。

そこで不意に部屋にある唯一のドアが開く。

「あつ、起きたんだ。ねえ、これって何て読むの？」

入ってきたのは少女。くつきりとした鼻筋に大きな瞳。亜麻色の髪は肩甲骨にかかる程あるにも関わらず癖一つなく、驚くほど美しい四肢が身に纏う見慣れない服から僅かに出ている。まさに見紛うことなき美少女。胸の膨らみが申し訳程度なことが珠に傷と言う者もいるかもしれないが、その他のパーツがそれを補って余りあるほどの完成度を誇り、美しさと愛らしさを絶妙なバランスで兼ね備えさせている。

そんな彼女が手に持った彼の手提げ鞆——そのストラップを指さしながらなんとも明るい調子で声を掛けてきて、考えるより先に、彼の口はその答えを反してしまった。

「……柔敷やわしき 音衣沙ねいさ」

第五式

「や、やわす……やわしし……ネーサ。うん、ネーサだね」

少女は数回名字を噛むと、結局諦めて名前のみを確認した。

「あ、ちよつと……」

「で、ネーサは変わった名前とか服装だけど何処から来たの？」

なんて笑顔で聞いてきた。

彼女は勘違いをしている。『柔敷 音衣沙』なんて名前、本名だと思ふなんて彼も思っていないかったために言いそびれてしまったが、それは現在人気急上昇中のアイドルの芸名なのだ。ちなみにそのアイドルは勿論女性で、さらに言えば彼の妹だったりする。

一連の込み入った説明をしようとした彼だったが、笑顔という強大な兵力の前に屈服し、まあいいか、なんて思ってしまった。

「すみません。何処から……というか、今ここが何処かさえ分からないんです」

取りあえずのですます調。相手は自分より年下であるのはほぼ間違いないとは思っていたが、助けられたようである現状、まずは態度から感謝の意を示さないと考えたのだ。ただ、どんな状態で出会っても、リアルでのコミュニケーション不全である彼はこんな口調になってしまったかもしれないが。

「えっ……もしかして記憶喪失か何か？」

「いや、そういう訳じゃ——」

「と、その前に……はい、これ。あと僕はミリュエリア・ルイン。

みんなはミリュエって呼ぶよ」

ミリュエは木製の器を手渡しながら椅子を一つベッドの脇まで運んできて、そこに腰かける。器の中身は数種類の野菜が入ったスーブだった。

「あなたのことは何て呼べばいい？」

「あつと……じゃあ、ネーサで」

「了解——じゃあ、ネーサ。僕相手にそんな畏まった話し方しないでいいよ。話しづらいでしょ？」

「わかった、ミリュエ」

彼——ネーサは息を吐き出し、肩の力を抜く。

ミリュエはネーサが今まで接したことのないタイプの人間だった。決して強引という訳ではない。けれど彼女の言葉には有無を言わせぬ何かがあったのだ。

「俺の話始める前に一つ聞きたいことがあるだ。今いるこの場所は何という場所？出来るだけ詳しく教えてほしい」

「ここはミリセリア最南の村、プリンシピア。大河ルテールを挟んでグリフランドと接する国境付近の村でもあるよ」

質問の意図とは別に、ネーサはミリュエという人物に対する自己分析に新たな情報を加える。それは恐らく彼女は頭の回転が驚くほど速いということ。彼女は、現在の居場所を聞くという理解不能な質問の意図を先ほどまでのネーサの言動と出来るだけ詳しくという要望から推測し、疑問も挟まずに答えたのだ。しかも、固有名詞を多く含んだその返答から、彼女の推測がおおよそ的を射ているのは明らかだった。

同時にネーサは落胆する。聞いた全ての名詞は、彼が知る世界の

どこの地名でもなかった。外国語ならただ知らないだけという可能性も残るが、ミュリエの話すそれは流暢な日本語。その可能性もないだろう。

「信じられないかもしれないけど、俺は違う世界から来たらしい」
「違う——えっ？」

絶句するミュリエ。目の前の男が自分は異世界から来たなんて言い出したのだから無理もない。信じてもらわなくてもいいけど、不審者として突き出すとかは勘弁だな、などとネーサが暢気に構えていると、フリーズしていたミュリエが突如部屋を飛び出して行き、直ぐに何かを持って戻ってきた。

「これを見てっ」

半ば叩きつけるような勢いで机に羊皮紙が広げられる。どうやらそれは地図のようだった。

「この村がこの辺り。で、ミリセリアの首都セナートがここ。これがルテル。どう、見覚えないっ？」

勢いよく言われても無いものは無い。地図に描かれた大陸は一見オーストラリアにも見えたが、それにしては斜めに潰れていたし、オーストラリアにはY字型に大河が流れてなどいない。

ここまで来ても、自分が異世界に来たなどという可能性すら思い浮かばない人間もいるかもしれない。しかし、彼のヲタク的経験論——と言っても飽くまで疑似体験を基にしたものだ——がここは異世界だと最早確信に近い形で予感していた。

ネーサは少しでも既知なものを探そうと注意深くその地図を見つめていたが、やがて溜め息を吐き、首を横に振る。

「全く見覚えなし」

返事をしつつ、ネーサは少女の反応を予想する。良くて困惑か同情。悪ければ恐怖や猜疑。ここにどんな信仰や習慣があるかは分からないが、最悪の場合は捕縛も十分にありうるというのが彼の考え。

「そっか……」

しかし、少女は喜色と期待の入り混じったような顔で呟いた。

第六式

「ミュリエ、入るぞ」

声と共に扉が開く。

ミュリエの反応に違和感を感じたネーサだったが、それを口にするタイミングを完全に失ってしまった。

「そうか、目を覚ましたのか」

ネーサは新たに入室してきた少女を観察する。常識的に考えれば明らかに初対面なのだが、不思議とネーサは少女の声に聞き覚えがあった。そう思っ注意深く見ると、容姿も見覚えがある気がする。

彼が首を傾げているのを見かねてミュリエが助け船を出す。

「森でネーサと一緒に倒れていた子だよ」

「えっ……女の子だったのか」

言われてみれば、線の細い少年だと思ったのは少女だったからかと納得するネーサ。

しかし、遠目だったことや服装で判断できなかったことを除いても失礼なことを言ってしまったと思い、冷静になったネーサは少女の顔を盗み見る。

彼女は何の感情も顔に浮かべていなかったが、ネーサにはそれが惘然とした表情をなんとか押し隠しているように見えた。

「わ、悪い」

「いや、昔からよく間違えられるから気にしてない」

「なんて言ってるけど、実は結構気にしてるからもつと謝らないと」
「ミュ、ミュリエ」

軽く怒った少女から逃げるようにミュリエはひらりと椅子から立ち上がると、そのまま扉へと向かっていった。その途中で不意に振り返る。

「僕はネーサが起きたことを村長に伝えてくるよ。その間に自己紹介とかを済ませとして」

晴れやかな笑顔と共にその言葉を残し、彼女は部屋を出て行ってしまう。出会ったばかりの——しかも、かなり複雑な出会い方をした二人の間に居心地の悪い空気が流れ、遠ざかっていくミュリエの足音のみが二人の耳に響いていた。

「あの、さ……」

沈黙を破ったのは少女の方。彼女は意を決した様子で言葉を続ける。

「師匠の仇を討ってくれてありがとう」

「別に俺はそんなつもりじゃ——」

「それでも、ありがとう」

飾り気のない言葉は彼女の不器用な性格を表しているのだろう。しかし、だからこそ余計に彼女の真摯な想いが伝わって来て、ネーサは言葉を飲み込む。彼は戸惑っていたのだ。彼は久しく心からの感謝なんて受けていなかったのだから。

もともとネーサは社交的な方ではない。むしろ、人見知りの気が強いくらいである。そんな彼だから、互いに無言であった時よりさ

らに動揺してあっちへキヨロキヨロ、こっちへキヨロキヨロ。それが解決策になるはずもなく、彼は取りあえず質問を試みることにした。

「あ、と……な、名前は？」

わずかに声が裏返る。

ぶっきらぼうというより幼稚な質問。下手すると意図も伝わらないかもしれないなんて考えがネーサの頭を過る。

「私はキルト——キルト・トゥインハルトだ」

幸いにもネーサの意図は伝わり、キルトは微笑と共にそう答えた。

木戸を開けて家を出ると、子供たちが遊びまわっているのが見えた。

「あつ、ネーサだっ」

「本当だっ。おはよう、ネーサっ」

「ああ、おはよう」

俺がこの村で目を覚ましてから早一週間。子供たちも普通に挨拶してくるほど俺は村に馴染んでいた。

「ただ、名前をミュリエ相手に妥協したのは失敗だったな」

「どうしたの、ネーサ？」

「いや、何でも」

後から出てきたミュリエに独り言を聞かれ、きまりの悪さを感じながら返答する。俺は今、キルトと共にミュリエの家に居候していた。

慣れとは恐ろしいもので、最初は何をするにも驚いていた俺も、今ではすっかり普通にこのプリンシピアでの生活に違和感を感じなくなっている。あまりに早すぎる順応に、内心自分でも引き気味だ。こういう時、普通は故郷へ帰ろうと躍起になったり、物凄く落ち込んだりするものだろう。飽くまで、マンガやアニメの普通だが。

……ちなみに少女二人との共同生活における心労はフィクション世界通りだった。

「村長の用事ってなんだろうね？」

村の小道を歩いていると、隣に並んだミュリエが話題を投げかけてくる。

村長は素性の知れない俺を快く村に——より正確に言うならミュリエの家に——置いてくれている人物だ。感謝しても感謝し切れない。そんな村長が頼みがあって呼んでいるとあれば、行かないわけがなかった。

「さあ？キルトじゃなくてミュリエと俺ってなると天理術関係でもないしな」

天理とはすなわち天の理^{しんり}。この世界に存在する絶対的な法則だ。それを人が持つ顕現力で制御するのが天理術。天理術には、神への祈りにより天理を自身の内にロードする祈祷天理と、人の言葉により天理を表して発動する言刻天理とがある。人の言葉とは要するに数式で、この世界ではいたる所に数式が刻まれていた。

この天理術には才能によるところが大きい。そして、キルトの才能とミュリエや俺の才能は天と地ほども差があった。勿論、キルト

が天。

長々とした話だが、誰にでも伝わるように言っならいっつとだ。

この世界には、魔法がある。

第七式

「おお、来たか二人とも」

腕を広げ、大げさなアクションで俺たちを歓迎する中年男性。俺たちが到着すると、村長は自身の家の前で待っていた。

村長キャラは老人で、杖を突いていて、「くじゃ」的な口調という俺のイメージは、この人に会った途端に崩壊した。もし俺が元々いた世界に村長がいたら、ちょい悪ファクションとかが彼には似合っただろう。そして、この人は間違いなくそういうファクションに走る人だ。

「ミュリエ、先に家に入ってくれ。俺はネーサと大事な話があるんだ」

「わかりました」

大事な話ねえ。

ミュリエを家に入れる村長の顔は典型的な悪いことを考えている顔だ。どうせろくな話じゃない。

「で、話ってなんですか？」

「若い男と美少女二人が一つ屋根の下で生活しているんだ……正直なところ、問題の一つや二つやらかしただろ？」

「は……………」

最初、村長の言っている意味が分からなかった。が、村長のニヤニヤ面で思い当たる。

「この変態オヤジがつ！」

取りあえず、鳩尾に一発入れといた。

「グフツ——お前、そんな顔しているからまさかと思ったが……男の方が好きなのか？」

今度は無言でアッパーカットしといた。

ちなみに村長が言った「そんな顔」というのは、あながち冗談ではない。俺も顔を洗う時、水面に写った顔を見て驚いた。そこには見知らぬ顔があったのだ。まさにトリップもの。――と、言っても超絶イケメンに変身していたとかじゃない。中性的に、そして幼くなっていたのだ。どうせトリップものならイケメンになって王道ハーレム系が良かったけど、世の中そんなに甘くないらしい。

「キルトに手を出したら死は免れんだろうが、恐らくミユリエならいける。確かにあいつは自他共に認める腹黒キヤラ。しかし、その実、情に流されがちで、十八になっても白馬の王子様を待っているような乙女なところもある。一度関係さえ持つてしまえば――」

俺は村長からじりじりと遠ざかる。

キルトは銃の天理術を使いこなし、腕つぶしでお金を稼ぎながら師匠と二人で旅をしてきたような少女だ。確かに俺が気の迷いを起こそうものなら、間違いなくあの世逝きだろう。だが、村長は気づいていない。実は、扉を少し開けて話題の主が俺たちの話を盗み聞きしていたことに。そして、彼女が今自身の頭上で鍋を掲げ、今まさに振り下ろさんとしていることに。

「こおおおおおの、変態村長があああああああつ！」

……悲鳴はなかった。ただ、いやに鈍い音が響いただけ。俺の気のせいじゃなければ、鍋が少し凹んでた気がする。

「……お邪魔しまーす」

「はい、どうぞ」

触れてはいけない予感がして、俺は村長の屍を越えて家に入る。他人の家だつてのに、何故か笑顔でミユリエが迎えてくれた。

「で、どうする?」

「あはは……どうしよつか?」

「あのなあ……」

勝手に席に着いたところで、流石にミユリエに振ってみた。が、まあ、結果はほぼ予想通り。形だけの呆れ顔を作っておいた。

「じゃあ、本題に入るか」

「うおっ」

「きゃっ」

思わず二人で仰け反る。

一瞬前までぶっ倒れていた村長が俺たち二人のいる机脇に立っていた。先ほどとは打って変わって真面目な表情をしているから、真剣な話なのだろう。

「実は最近インテグラートの町長が代わってな。どうやら、周りの町や村まで支配下に置こうとしているらしい」

「なんでそんな……」

ミユリエが絶句するのも無理はない。俺が聞いたところ、この国

は完全な王制で、末端の町村の長は基本的にその住人達が決めている。そこまで暴走するような人物が長になって、しかも権力を握るなんてなかなかあり得ないだろう。

「となると、真つ当な手段で長になってないな……」

「よくわかつてるじゃねえか、ネーサ。噂じゃ新しい長は元盗賊つて話だ」

「そっか。力づくで従わせている人たちと、元々の部下で勢力を広げているんだ」

納得したようにミュリエが呟く。やっぱり彼女は物分かりがいい。

「国に訴えようって話もあるんだが、どうせこんな辺境のことを国は気にしちゃくれない……そこで、だ。村の相談役のミュリエに意見を聞きたいと思って呼んだわけだ」

村の相談役——それがミュリエの肩書兼職業。彼女がこの若さでいきなり二人の人間を居候させることができるような家や財力があるのは、この職業のおかげだ。

彼女は頭が切れる。そして、彼女の判断は基本的に客観的に利害のみを追及している。しかし、俺やキルトが倒れているのを、一度見捨てると判断しながら見捨てられなかったり、してしまうように、自分でも嫌々ながら情も持ち合わせた判断もできる。そんな彼女だからこそ、村人たちは腹黒などと揶揄しながらも慕うのだろう。

「少数の人員で偵察に行つて、彼らの力がこの村まで届くのかを探りましょう。あと、勢力の内情も」

そんなところが妥当だろうな。渋い顔で茶を飲みながら村長も頷いてるし。

「——というわけだ。ネーサ、いっちょ頼まれてくれないか？」

……。

「俺っ！？」

流石に、大丈夫だ、問題ない。なんて返せなかった。

第八式

「あとはミュリエ」

「りょーかい」

ミュリエは諦め顔で返事をする。この危険な偵察を意見した責任に釣り合うリスクを自分は負わなくちゃいけないから、とか何とか考えてるんだろな。結局他の奴に行かせるくらいなら自分が行かせるくせに、その辺の自己分析がまるでできてないからな、ミュリエは。

——って、違うっ。問題は俺が何で入ってるかだ。

「村長、受ける断る以前に俺が入ってる理由がわからないです」

ファンタジー系の主人公はこういうイベントを比較的ホイホイこなしていくイメージがある。だけど、それはあいつらが一般人とは一線を画した能力値を持つてるからだ。対して俺のパラメータは明らかにモブキャラのそれ。出来る出来ない以前に、そもそも俺に頼む謂れがない。

「何言ってるんだ、お前は。ドラゴンを倒せるような奴がいれば、安心してミュリエを行かせられるだろう？」

「なっ……」

またそれか。

俺がこの世界に来たあの日。ミュリエに言われて探しに来た村人が倒れている俺とキルトを発見した時、目の前に首から上の吹き飛んだドラゴンの死体があった。その事実とキルトの証言から村人は

俺が凄腕の天理師——魔法使いの天理術版だ——だと思っている。
目覚めてすぐの頃は身に覚えがないやら、照れくさいやらで必死に
否定していたけど、最近では一々説明するのが面倒になって聞き流
していた。

「お前は否定するかもしれないが、お前には才能がある。何せ私は
この目で見ているのだからな」

出たな、俺〓凄腕天理師説の提唱者ことキルト。

……いかん。こつちに来て以来、自然治癒したと思っていた中二
病が再発症している気がする。

兎に角、俺は奥の部屋から出てきたキルトに言い放つ。

「いくらキルトが言おうと、俺は天理師なんかじゃない。それはキ
ルトも分かっているだろう」

今この部屋にいるのは、俺が異世界の人間と知っている人間だけ。
だからこそんな台詞も吐ける。流石に自分の正体ぐらいは村でも
隠していた。

「別にネーサが天理師だと言いたいわけじゃない。才能があると言
ってるんだ。少なくとも私の数十倍はな」

「数十倍って……流石に盛り過ぎ——もとい大げさだろ。しかも、
あれ以来何も出来てないわけだし」

「そうでもないさ。私は全力でもあの天理術であの規模は出せない。
あれ以来術が発動できないのは、きっかけが必要なんだろう」

あの規模とは、ドラゴンの頭を吹き飛ばした爆発の規模のことだ。
キルトの分析によると、俺が偶々投げた銃把グリッブに刻まれていた術式

$$V \parallel V ? (1 + \beta t)$$

に、偶々俺の顕現力——天理術を発動させるための力。魔法にとつての魔力みたいなものだ——が流れ込んだ結果、偶々天理術が発動したらしい。

天の理ことわりなんて言うから身構えてしまうが、何のことは無い。ただの物理公式だ。この世界の住人にとっては、天が定めた法則を人の知識によって表したものらしいのだが、俺には見慣れすぎて有難みも何もあつたもんじゃない。

ちなみに

$$V \parallel V ? (1 + \beta t)$$

は、俺の記憶が正しければ熱膨張における体積膨張率の公式だ。一般的な爆発が気体の急速な膨張であると捉えれば自然な術式と言える。

「ネーサにも説明したと思うが、天理術の出力は才能、顕現力の総量は如何に天理を理解しているかによって決まる。私の想像通りなら、お前は逸材だ」

「……いやいや、天理の理解度とか、理系知識の総量だろ。俺以上の奴なんて五万といるぞ」

「何か言ったか？」

きょんとした顔で問い返すキルト。俺の小声でのツツコミはキルトには届かなかつた模様だ。まあ、届いたところで意味不明だとは思うが。

と、大人しく二人の会話を聞いていたミュリエが黒い顔をしていた。何か思いついたのだろうか。

「まあまあ、ネーサ。取りあえず一緒に行こうよ。キルトもついて来てくれることだし」

これは俺もキルトが出てきた時から予想していた。恐らく村長はこの流れを読んでいて、初めからこの三人で行かせる気だったのだろう。だけど、だ。頭脳担当のミュリエと護衛のキルト。このパーティに俺を入れたって、立ち位置は序盤の人数合わせキャラがいいところだぞ。

「それとも、ネーサは女の子を二人だけで危ない仕事に送り出すような人なんだあ？」

ニヤニヤとしながら聞いてくるミュリエ。わざとらしい溜め息といい、組んだ手に顎乗せるポーズといい、追いこんでいるのを自覚しているとは思えない。

ああ、そうだろう。こんな言い方されて断れる男なんているわけない。——いや、いるかも知れないが、今の中二病再発中の俺には断れない。

「仕方な——」

「よし、決まりだな」

「せめて最後まで言わせろよっ!!」

村長の会心の笑顔を無性に殴りたかった。

第九式

という訳で偵察——要するに旅の準備。と言っても、俺の旅の準備は一瞬だった。そりゃあ、そうだ。何せ私物は鞆一個分しか持っていない上に、旅に何が必要なのかなんて見当もつかない。実質、旅仕度はミュリエとキルト任せだ。

……なんか格好悪い。

「じゃあ、張り切って行こーっ」

自宅の前で一人腕を突き上げるミュリエ。笑顔満開。まるで遠足にでも行くようなテンションだ。

「集落から一度外に出れば、そこはいかなる危険が潜んでいるかも分からない場所だ。気を抜くなよ」

なんて天理術に使う拳銃の感触を確かめながら目を細めてるのはキルトさん。

この二人、両極端過ぎる。いや、ある意味バランスの取れたパーティなのかも知れないが。

「さっさと行こう。日の高いうちに隣の村に着きたいんだろ?」

「おしっ、出発!」

ミュリエの掛け声とともに俺たちは歩きだした。

プリンシピアは村の外を森に囲まれている。しかし、その森には

いくつかの小道が作られており、俺たちはその内の一つを進んでいた。景色だけ見たら、郊外の山にハイキングに来たみたいだ。

「やはり南方はいいな。景色明るく魔物も滅多に出ない」

「そっか。キルトはいろんな所を旅してたんだもんね。やっぱり、北は魔物が多いの？」

「最近北より西が酷いな。北西のエクスタニアが傾いて、魔物が跋扈しているんじゃないかなんて噂まで出るくらいだ」

俺も最近ではこちらのことを少しずつ勉強してはいたが、流石に地理の話とかになるとさっぱりだ。エクスタニアってのは確か、この国の北西にある国だった気がするが――

「――つて、魔物っ!？」

「何んでそんなに驚いてるの、ネーサ。ネーサの国にも魔物くらいいたでしょ？」

「というか、お前はドラゴンも見てるだろうが」

二人に呆れた目で見られてしまった。

いや、確かにドラゴンを見たが、あれは特別だと思ってた。魔物とかマジ勘弁。というか、俺は確実にレベル1だけど。この辺りの魔物はきちんとレベル調整されているのだろうか？ぶっちゃけド○キーにすら勝てる気しないんですけど。

「大丈夫。南方の魔物程度には後れを取らないさ」

俺の動揺に気づいたのか、キルトが凄みのある笑みを浮かべながら、銃を指差す。ということは、やはりドラゴンは別格ということなのだろうか。

「もつとも、私は非力なミュリエの安全を第一に確保するから、ネーサはある程度自分でなんとかしてくれ」
「おいっ」

俺も非力だつて。というか、ただでさえ女子二人より多めに荷物を背負ってるのに酷くね？

ただでさえ坂道で重い足取りが、さらに重くなった気がする。

「ほらネーサ、シャキシヤキ歩く」

笑いながら俺の背中を押すミュリエ。元気だな。しかしこちら偶の運動はしても、基本は引きヲタ属性のネーサさんだ。車も電車も発達していない世界の少女より体力が少ないのが自然で……って、意外と疲れをあまり感じない。

「重力が小さいのか……いや、それなら体感できるはずだから、むしろここ数日で多少は体力が付いたのか……」

「何をぼそぼそ呟いてるのさっ」
「痛っ!?!」

背中を叩かれた。地味に痛い。

……なんて、ミュリエとじゃれあっていて気付かなかったが、キルトが真面目な顔で押し黙っていた。神経を研ぎ澄ませているのが、素人の俺にも分かる。

「二人とも、表情を変えずに聞いてくれ……困まれた」
「なっ……」

「……相手は人？獣？」

改めて思うが、ミュリエはただ者じゃない。俺なんて表情を変え

るないようにするので精いっぱいなのに、彼女は笑顔のままキルトに小声で問いかけていた。

「この気配は人間だ。気配の消し方が獣じみてない……というか、魔物だったらこんな簡単には気づけないだろう」

キルトがそこまで言い切るならそうなのだろう。だけど分からない。まだ村を出て30 40分といったところだというのに、何者なんだ？

「……この辺りは野盗なんて出ないし。仮に野盗だとしたら、女二人に男一人の僕たちみたいな集団にわざわざ様子見なんてする理由がない。だとすると……」

ミュリエがボソボソと呟きながら考え込んでいた。

ここ数日一緒にいて分かったことだが、彼女にはこうして独り言を漏らしながら思考を巡らせる癖がある。この時のミュリエは常にも増して頭の回転が速い。

……ちなみに、今は表情が先程までと変わらずニコニコしているから、結構怖かったりする。

「キルト、どうにかなりそうなのか？」

「正直微妙だ。連中は陣形を常に一定に保ったまま付いてきている。ということは、訓練がきちんとされている集団なのだろう……私が指揮官だったら、標的の中で弱い者から狙う」

つまり、俺やミュリエが足手纏いつてことか。

俺に何の取り柄もないことは知っていたが、ここまで来ると自分に怒りさえ覚えてくる。

「キルト、このままじゃ僕たちの不利は変わらない。こっちから仕掛けよう」

長考を終えた頼れる我らが相談役は、ミユウ相変わらずの晴れやかな笑顔でそう言った。

第十式

「走れっ!!」

キルトの掛け声を合図に駆け出す。

と言つても、相手もただ者ではない。普通に走り出すだけでは直ぐに囲まれてしまう。だからこそ……

「——言刻銃撃、即時、連続発動」

まき上がる砂埃。

弾数的にも時間間隔的にも通常の拳銃ではありえない——それこそ左右の拳銃から放つマシンガンのような銃撃を以って、キルトが俺たちの両脇に砂の壁を作り上げる。

この世界の魔法——天理術の内、キルトが使う言刻天理はあらかじめ術式を書き込んでおけば特に言葉を使わずに発動できる。が、その分イメージで操る特性上、制御の難易度は上がってしまうのだ。よって、キルトの銃撃天理のような複数の言刻天理を組み合わせて一つの動作をしているものを発動する際に、発動タイミングや動作を口に出すことでイメージを安定させるといふ手法を採る者は多い。むしろ、キルトほどの簡潔な言葉で完全に発動できる者の方が稀らしい。それが功を奏したのかもしれない。

「逃げ切れそう？」

「ほぼ全員の意表は突けたらしい。だが——」

キツ、と鋭い視線を前方に向けるキルト。

何かいるのだろうか？

「そこまでだっ」

脇の茂みから飛び出した人物によって発せられた声が、俺たちの足を止める。

剣を構えたその人物は、少女だった。

「……ねえねえ、この世界ってキルトみたいな女子がデフォで、ミユリエみたいなのが少数派なわけ？」

「……違うよ。村には普通の娘もいたでしょ。僕みたいなのが普通で、剣やら銃やら振り回している方が不思議なんだって」

「そこ、密談は止めてもらおうか」

……怒られた。

でも、中身が聞えたからって訳ではなさそうだ。何しろ、同じ戦闘慣れしたタイプでも、キルトが細かいことを気にしないのに対し、この少女は生真面目そうなオーラ全開だし。きっと、純粋な注意だろう。

そうこうしている内に、後から3人の男たちが追いついてきた。少女と男たちは全員同じデザインの制服を来ている。この時点で、やはり盗賊などではなさそうだ。

「グリフランドの王都騎士団が私たちみたい な者に何のようだ？」

「なんと……この制服だけでわかるのか」

「旅が多いものでね」

本来こういう舌戦での腹の探り合いはミユリエの領分だ。それをキルトがしているのはわけがある。ミユリエを戦略構築に専念させるためだ。

「とりあえず質問だ。君たちはこの先の村、プリンシピアから来た。間違いないな？」

「ああ」

「では、君達は何者だ？」

「ただ、村から旅に出ただけだ」

あれー？何かタイプが似てるからか？この2人、ただ質問と回答を繰り返しているだけなのにどんどんムードが険悪になってる気がする。というか、2人とも徐々に武器に手が伸びている気がするけど、そんな雰囲気になる要素があったか！？

「……あ、あのキルトさんや？時間稼ぎじゃなかったのですかい？」

「……いや、何かこいつと話していたら奇々してきて——」

「密談は止めると——言っただけだっ」

剣を抜き放った少女が一気に距離を詰めてくる。……いやいやいやいや、アンタ絶対戦闘を吹っ掛ける口実探してただろ！？

「下がれ、ネーサ。ミュリエの傍にいろっ」

「ちょ、キルトっ！？」

なんて切迫した台詞を吐きながらも、口元緩んでますよ！？キルト最初から殺^やる気満々だったでしょ！？……ミュリエの声もまるで聞えてないみたいだし。

間合いは完全に剣の間合いだ。それなのにキルトは怯むことなく自ら蹴りを入れる。

「良い蹴りだ。銃だけではないということか」

思わぬ反撃に相手の少女は一度後退。剣を構えなおす。

というか、キルトもそうだけど、俺たちもヤバくないか？俺とミユリエじゃ後の3人の相手はできないぞ。

「分かっているな。これは一騎打ちだ。他の者は手を出すな」

どうやら俺の心配は杞憂だったみたいだ。やはり彼女は相当真面目なキャラらしい。

……ただ、俺のヲタク的経験上、こういうキャラは融通が利かないとかの欠点がある代わりに単純な戦闘力は高いことが多い。

「今度はこちらから行くぞっ！」
「くっ」

ただでさえ近距離戦。

しかも、悪い予想は的中したらしく、制服少女は強いみたいだ。剣を振り回す相手に、キルトは受けに回ることが多くなっている。しかし、相手は相手で決め切れないことに焦れているようだ。

「貴方はなかなか強いようだ。私としては必要以上に傷つける気もないことだし、これで決めさせてもらっ」

うわっ、決定打を放つ前に事前連絡しちゃうって現実にいるんだ！？——じゃなかった、これはかなりピンチなのでは？キルトも流石にまずいと思ってることが表情に出ているし。

「薙ぎ払え。我が突きを以て一度の閃きを乞っ」

考える……どうせ知識しかないんだ。相手の詠唱は聞いた。後はどこかに発動式が刻まれている筈だ。だけど……くそ、間に合わない

いつ。

少女が力強く踏み込む。刺突だ。

しかし、あの距離では剣の切っ先はキルトに届かない。

——瞬間、剣の柄部分に刻まれた数式が目が捉える。

「伏せろ、キルト!!」

叫びながら俺は隣のミユリエを無理やりしゃがませた。

第十一式

俺が剣の柄に見た数式はそう複雑な式じゃない。

$$r = a(1 + \cos \theta) \quad 0 > a > 10$$

ただ、これだけだ。

数式の方はカージオイドと呼ばれる閉曲線を表す数式で、これは別名心臓型とも呼ばれる。俺の記憶が正しければ、あの曲線は原点から見て一方のみが潰れ、他方は大きく膨らんでいる。だから、剣先から斬撃を発生させるのだとすれば、発動者の側のみ斬撃を向かわせないということが可能なのだ。

そして、もう一つは本来条件式。aは0を超過し、10未満である何かの数字になるということを表す筈。だけど、俺の勘では——
「——やっぱり、0から10への変化か。カージオイドを描く平面が剣の面と同じ向きだっていう仮定も正しくて良かった」

aは簡単に言うと、閉じた曲線の広さを表す。つまりaが0から10へと変化するというのは、だんだん図形が広がることなのだ。
……咄嗟に伏せなかったら今頃真つ二つだぞ、この野郎っ。いや、女だけどさ。

そんな俺に、一緒にしゃがんだミュリエが話しかけてくる。

「……ねえ。予想が外れてたらどうなっていたの？」
「……ミュリエ（上）、ミュリエ（下）という表記が必要になってたかも」

……殴られました。

「つて、そうだ。キルトは!？」

「助かったぞ、ネーサ。……と言っても、向こうに殺す気はなかったみたいだが」

「へっ？」

「当然だ。私は問答無用で人殺しなんてする気はないし、本気で放てば、私の部下たちも危ないだろう？」

見れば、俺たちの後の男たちはそれぞれの剣で斬撃を受け止めていた。——というか、問答無用で戦闘に持ち込んだ人に、人殺する気はないと信じて言われても、なかなか信じ難い。

「そんなことは知らないが、少なくともお前の切り札は避けた。それを乱発すればお前の部下もただでは済まないだろうし、逆に堂々と放つのなら私はもう避けられる。どうする？」

キルトは不敵に笑う。

確かにキルトの言う通り、相手の大きな持ち札をただで使わせたのはデカイ。だけど、振り出しに戻っただけにしては自信満々過ぎるだろ、キルト。

……ほら、相手の人も全然動揺してないし。むしろ負けず嫌いに火が付いた感すらある。

「どうするも何も、我が剣を以って何者かを聞き出すのみ。少々の痛みは諦め——これはっ」

「んっ!？」

向き合っていた少女二人が同時に反応し、続けて後ろの男たちもざわつき出す。

「副隊長、恐らく追ってかと」

「追いつかれたか。……時間をかけ過ぎた私の責任だな」

部下の言葉に少女が頷く。というか、副隊長だったのか、この娘。そんな感想しか抱けない俺とは違い、隣でミュリエはぶつぶつ何か呟きだしていた。恐らく今の二人の会話から何かを考えているのだろう。

相手がお取り込み中な隙に、キルトがこっちに来る。

「新手だ。気配も足音も隠す気がまるでないような連中がわんさか来る」

「……ふーん。そういうことか」

キルトの情報を入手したことで何かを確信したらしく、ミュリエは笑みを浮かべる。……黒笑いだな。

「ねえ、貴方たち」
「ん？」

今まで引つこんでいたミュリエが自ら話しかけてきたことに驚きを浮かべる副隊長さん。だけど、一瞬で切り替え聞き返してくる。彼女はまだ知らない。こうなったミュリエはキルトより怖いんだ、うん。少なくとも俺と村長の意見はそう固まっている。

「何か？」

「貴方たち、どこから今向かってきている集団に追われてきたんだよね？それは恐らく何処かの村。追手連中は一般人に成り済ましていた。だから僕たちにも警戒をしている。ここまではあってる？」
「ああ。だけど、今の話では疑いが深まったくらいだぞ？」

「そ、だからここからが交渉——」

マンガだったら「にやり」って擬音が付くくらいの笑顔になるミユリエ。むしろ、あれか、計画通り、ってやつ。

「——僕たちはそいつらと全然関係ないって言ってもどうせ信じないだろうから、そこはいいや。それより、貴方たちが逃げてきたってことは、正面から戦っても勝てないってことでしょ？ だけど、もう逃げられるような距離でもない。なら、残された道は、信じるか信じるかは関係なく僕たちとの共闘だけなんじゃない？ 少なくとも、僕たちが今来てる連中の仲間ならこの共闘を呼び掛ける意味は無いよね？」

「共闘をするふりをして後ろから襲えば、より少ない犠牲で私たちを捕らえられる」

「だったら僕たちを縛り上げてから迎え撃つ？ 僕たちは一般人だからちゃんと守ってくれないと困るよ？」

「くっ……」

相変わらず嫌な攻め方をする。だけど、副隊長さんみたいな真面目なタイプにはよく効きそうだ。だけど正論。縛り上げられても俺たちは連中と知り合いじゃないから、接敵した瞬間に足手纏いになるだけだ。

「ほら、どうするの？」

あくま
ミユリエは悩める民に選択を迫る。

第十二式

……交渉の結果、一時休戦して共闘と相成りました。

ということで、か弱き子羊ことネーサさんと腹黒参謀のミュリエは、副隊長さんと愉快的仲間たち＋キルトに周囲を守られ、辺りをキョロキョロ。

「いい、ネーサ？僕はそもそも戦いなんて素人なんだから、まともな指示なんてだせるわけない。だから、頼みの綱はどちらかと言えばネーサなんだよ」

「はいつ？」

いやいや、俺こそ出来ることなんて何もないでしょ？日常パートでの俺に対するハードルの高さは冗談で済むけど、戦闘パートでそういうの良くないから。それともあれか、ヲタク的知識でなんとかしろってか？それこそ、そんな二次元みたいな芸当できるわけない。

「ネーサ。おい、ネーサってばっ」

「——はいつ、何でしょうかつ？」

「何で敬語さ？——というのはともかく、そんなに悩まなくても、ネーサには武器があるじゃん」

「武器……？」

「本気で分かってない顔だね……いい？ネーサの武器はその知識だよ。村にいた時も、ついさっきも、一目見ただけで天理術の中身を予想出来てた。きつとネーサなら天理術が相手でも対処できる筈」

「そんなの——」

——習ったから。

と、続けようとして止めた。

村にいた時から気付いていたけど、この世界では天理術の式——俺達の世界での数式や化学式がそれほど広まっていない。皆、生活に必需なものや一握りの本当に有名な式を知っている程度だ。

——さつき、キルトが危なくなつた時に無意識に思ったこと。俺には考えることしか出来ない。——いや、違う。俺には考えることが出来るんだ。

決意が変われば、周りを見る目も変わってくる。傍観者から参戦者へと意識を切り替え、注意深く周囲を観察する。

「うん、それでよろしい」

「二人とも、そろそろ来るぞっ」

うむうむ、とミユリエが頷いているのを横目で見てみると、キルトからそつと声が掛る。

「乱戦になる……自称非戦闘員の二人を庇う余裕があるかはわからないからそのつもりで」

「……厳しいっす、副隊長さん」

「お前の副隊長になつたつもりはない」

やっぱり厳しいっす。言葉のそこかしらに棘が散りばめられているのをひしひしと感じますよ。

「やっと追いついたぜっ」

「お頭は始末して構わねえってよ」

「あん？——人数が増えた気がするぞ？」

「構うもんか。全員殺っちまえば変わりやしねえ」

「ちげえねえ」

驚いた。

まずはこんなテンプレートな盗賊衣装の人が本当にいるんだという驚き。

しかも、最近のRPGに出てくるようなスタイリッシュな衣装の盗賊ではない。一昔前風の薄汚れた防具と獣の皮とボロボロの布を組み合わせたやつだ。全然萌えない。

次に、こんなテンプレートな台詞を吐く盗賊がいるんだという驚き。

ちよ、おまつ……お頭つて……殺つちまえて……これ創作物の中だったら完全な死亡——しかも、フルぼつこにされるフラグだぞ。そして、何よりもこんなギャグみたいなシチュエーションでも、リアルで体験して、相手の殺気や武器が本物だとこんなに怖いのかということに驚いた。

俺たちを囲んだのは七人の男たち。森から飛び出すと、ジリジリ距離を詰めてくる。

「遅れるなよっ」

「——お前もなっ」

最初に仕掛けたのはキルトと副隊長さん。

——いやいや、わざわざこつちから仕掛ける必要ないでしょ。つて言う、心の底からのツッコミはきっと二人には届かないんだろうな、うん。

「——言刻銃撃、即時、連続発動」

殺さない程度（——にしていると信じたい）連射の銃撃天理で一人。さらに、副隊長さんの流れるような剣さばきで一人が倒れる。

強い。他の三人は互角の一对一を繰り広げている中、瞬殺とは。やっぱり、あの二人はこの世界の平均に照らし合わせても別格みたいだ。

ともかく、これで戦力比は互角だ。

「くそっ……重くなれっ、ぶっ潰せっ」

柄が槍のように長いハンマーを持った男が副隊長さんに向けて武器を振り下ろす。彼女は剣を両手で頭上に掲げ、受け止める気みだ。力勝負なら男の方が有利かもしれないが、それでも彼女なら受け止められる。そう先ほどの戦いが俺に信じさせる。

「……だけど、何だろう。何かが頭に引っかかる。違和感。——そういえば、男の台詞はまるで——」

駆け出す。地面を力の限り蹴りながら、男の武器を観察する。……あつた。

M＝200×m

鈍い色のハンマー部分に薄らと式が見えた。

「嘘だろ!?——受け止めるなっ!」

さながらアメフトのタックルのように副隊長に飛びつく。

——振り下ろされるハンマー。

——腹の底を揺さぶるような轟音。

土ぼこりが舞い、その場全員の視界は遮られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1279t/>

imaginary

2011年10月9日02時45分発行